

沙門 日 蓮 之を勸ふ

法華經の第七に云はく「我が滅度の後、後五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶せしむること無けん」等云云。予一たびは歎いて云はく、仏滅後既に二千二百二十余年を隔つ。何なる罪業に依って仏の在世に生まれず、正法の四依、像法の中の天台・伝教等にも値はざるやと。亦一たびは喜んで云はく、何なる幸ひあって後五百歳に生まれて此の真文を拝見することぞや。在世も無益なり、前四味の人未だ法華經を聞かず。正像も又由無し、南三北七並びに華嚴・真言等の学者は法華經を信ぜず。天台大師云はく「後五百歳遠く妙道に沾はん」等云云。広宣流布の時を指すか。伝教大師云はく「正像稍過ぎ已はって末法太だ近きに有り」等云云。末法の始めを願樂するの言なり。時代を以て果報を論ずれば、竜樹・天親に超過し天台・伝教にも勝るゝなり。

問うて云はく、後五百歳は汝一人に限らず、何ぞ殊に之を喜悅せしむるや。答へて云はく、法華經の第四に云はく「如来の現在にすら猶怨嫉多し、況んや滅度の後をや」文。天台大師云はく「何に況んや未来をや、理化し難きに在り」文。妙楽大師云はく「理化し難きに在りとは、此の理を明かすことは意衆生の化し難きを知らしむるに在り」文。智度法師云はく「俗に良薬口に苦しと言ふが如く、此の經は五乗の異執を廢して一極の玄宗を立つ。故に凡を斥け聖を呵し大を排し小を破る。乃至此くの如きの徒悉く留難を為す」等云云。伝教大師云はく「代を語れば則ち像の終はり末の始め、地を尋ぬれば唐の東、羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生、鬪争の時なり。經に云はく、猶多怨嫉況滅度後と。此の言良に以有るなり」等云云。此の伝教大師の筆跡は其の時に当たるに似たれども、意は當時を指すなり。正像稍過ぎ已はって末法太だ近きに有りの釈は心有るかな。經に云はく「悪魔・魔民・諸天・竜・夜叉・鳩槃荼等其の便りを得ん」云云。言ふ所の等とは、此の經に又云はく「若しは夜叉、若しは羅刹、若しは餓鬼、若しは富单那、若しは吉遮、若しは毘陀羅、若しは犍駄、若しは烏摩勒伽、若しは阿跋摩羅、若しは夜叉吉遮、若しは人吉遮」等云云。此の文の如くんば先生に四味三教乃至外道・人天等の法を持得して、今生に悪魔・諸天・諸人等の身を受けたる者が円実の行者を見聞して、留難を至すべき由を説くなり。

疑って云はく、正像の二時を末法に相對するに時と機と共に正像は殊に勝るゝなり。何ぞ其の時機を捨て、偏に當時を指すや。答へて云はく、仏意測り難し、予未だ之を得ざれども、試みに一義を案じ小乗經を以て之を勸ふるに、正法千年は教行証の三つ具に之を備ふ、像法千年には教行のみ有って証無し。末法には教のみ有って行証なし等云云。法華經を以て之を探るに、正法千年に三事を具するは、在世に於て法華經に結縁する者、其の後正法に生まれて小乗の教行を以て縁と為して小乗の証を得るなり。像法に

於ては在世の結縁微薄故に小乗に於て証すること無く、此の人権大乘を以て縁と為して十方の浄土に生ず。末法に於ては大小の益共に之無し。小乗には教のみ有って行証なく、大乘には教行のみ有って冥顯の証之無し。其の上正像の時、所立の権小の二宗漸々に末法に入って執心 弥強盛にして、小を以て大を打ち、権を以て実を破り、国土に大体謗法の者充滿するなり。仏教に依って悪道に墮する者大地の微塵よりも多く、正法を行じて仏道を得る者は爪上の土よりも少なし。此の時に当たって諸天善神其の国を捨離し、但邪天・邪鬼等のみ有って王臣・比丘・比丘尼等の身心に入住し、法華經の行者を罵詈毀辱せしむべき時なり。爾りと雖も仏の滅後に於て、四味三教等の邪執を捨て、実大乘の法華經に帰せば、諸天善神並びに地涌千界等の菩薩法華の行者を守護せん。此の人は守護の力を得て本門の本尊、妙法蓮華經の五字を以て閻浮提に広宣流布せしめんか。例せば威音王仏の像法の時、不輕菩薩「我深敬」等の二十四字を以て彼の土に広宣流布し、一国の杖木等の大難を招きしが如し。彼の二十四字と此の五字と其の語殊なりと雖も其の意之同じ。彼の像法の末と是の末法の初めと全く同じ。彼の不輕菩薩は初隨喜の人、日蓮は名字の凡夫なり。

疑って云はく、何を以て之を知るや、汝を末法の初めの法華經の行者なりと為すことを。答へて云はく、法華經に云はく「況んや滅度の後をや」と。又云はく「諸の無智の人 有って悪口罵詈等し及び刀杖を加ふる者あらん」と。又云はく「数々擯出せられん」と。又云はく「一切世間怨多くして信じ難し」と。又云はく「杖木瓦石もて之を打擲す」と。又云はく「悪魔・魔民・諸天・竜・夜叉・鳩槃荼等其の便りを得ん」等云云。此の明鏡に付いて仏語を信ぜしめんが為に日本国中の王臣四衆の面目に引き向かえへたるに、予よりの外には一人も之無し。時を論ずれば末法の初め一定なり。然る間若し日蓮無くんば仏語は虚妄と成らん。難じて云はく、汝は大慢の法師にして大天に過ぎ四禅比丘にも超えたり、如何。答へて云はく、汝日蓮を蔑如するの重罪又提婆達多に過ぎ無垢論師にも超えたり。我が言は大慢に似たれども仏記を扶け如来の実語を顯はさんが為なり。然りと雖も日本国中に日蓮を除き去っては誰人を取り出だして法華經の行者と為さん。汝日蓮を謗らんとして仏記を虚妄にす、豈大悪人に非ずや。

疑って云はく、如来の未来記汝に相当たれり、但し五天竺並びに漢土等にも法華經の行者之有るか如何。答へて云はく、四天下の中に全く二の日無し、四海の内豈両主有らんや。疑って云はく、何を以て汝之を知る。答へて云はく、月は西より出でて東を照らし、日は東より出でて西を照らす。仏法も又以て是くの如し。正像には西より東に向かひ末法には東より西に往く。妙楽大師の云はく「豈中国に法を失って之を四維に求むるに非ずや」等云云。天竺に仏法無き証文なり。漢土に於て高宗皇帝の時、北狄東京を領して今に一百五十余年仏法王法共に尽き了んぬ。漢土の大蔵の中に小乗經は一向に之無く、大乘經は多分に之を失す。日本より寂照等少々之を渡す。然りと雖も伝持の人無ければ猶木石の衣鉢を帯持せるが如し。故に遵式の云はく「始め西より伝ふ猶月の生

ずるがごとし。今復東より返る猶^{なほ}日の昇るがごとし」等云云。此等の釈の如くんば天竺・漢土に於て仏法を失せること勿論なり。問うて云はく、月氏・漢土に於て仏法無きことは之を知れり、東西北の三州に仏法無き事は何を以て之を知るや。答へて云はく、法華經の第八に云はく「如来の滅後に於て閻浮提の内に広く流布せしめて断絶せざらしめん」等云云。内の字は三州を嫌ふ文なり。問うて曰く、仏記既に此くの如し、汝が未来記は如何。答へて曰く、仏記に順じて之を勘ふるに既に後五百歳の始めに相当たれり。仏法必ず^{とつど}東土の日本より出づべきなり。其の前相必ず正像に超過せる天変地天之有るか。所謂仏生の時、転法輪の時、入涅槃の時、吉瑞凶瑞共に前後に絶えたる大瑞なり。仏は此聖人の本なり。経々の文を見るに、仏の御誕生の時は五色の光氣四方に遍くして夜も昼の如し。仏御入滅の時には十二の白虹南北に亘り、大日輪光り無くして闇夜の如くなりし。其の後正像二千年の間、内外の聖人生滅有れども此の大瑞には如かず。而るに去ぬる正嘉年中より今年に至るまで、或は大地震、或は大天変、^{あたか}宛も仏陀の生滅の時の如し。当に知るべし、仏の如き聖人生まれたまはんか、滅したまはんか。大虚に亘って大彗星出づ、誰の王臣を以て之に對せん。大地を傾動して三たび振裂す、^{おほぞら}何れの聖賢を以て之を課せん。当に知るべし、^{つうず}通途の世間の吉凶の大瑞に非ざるべし。惟れ偏に此の大法興廢の大瑞なり。天台云はく「雨の猛きを見て竜の大なるを知り、華の盛んなるを見て池の深きを知る」等云云。妙楽云はく「智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」等云云。日蓮此の道理を存じて既に二十一年なり。日來の災、^{ひごろ}月來の難、此の両三年の間の事、既に死罪に及ばんとす。今年今月万が一も身命を脱れ難きなり。世の人疑ひ有らば委細の事は弟子に之を問へ。幸ひなるかな一生の内に無始の謗法を消滅せんことよ、悦ばしいかな未だ見聞せざる教主釈尊に侍へ奉らんことよ。願はくは我を損ずる国主等をば最初に之を導かん。我を扶くる弟子等をば釈尊に之を申さん。我を生める父母等には未だ死せざる已前に此の大善を^{まい}進らせん。但し今夢の如く宝塔品の心を得たり。此の經に云はく「若し須弥を接して他方無数の仏土に擲げ置かんも亦未だ難しと為ず。乃至若し仏の滅後に惡世の中に於て能く此の經を説かん、是則ち難しと為す」等云云。伝教大師云はく「浅きは易く深きは難しとは釈迦の所判なり、浅きを去って深きに就くは丈夫の心なり。天台大師は釈迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す」等云云。^{あんしゅう}安州の日蓮は恐らくは三師に相承し法華宗を助けて末法に流通せん。三に一を加へて三国四師と号づく。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

文永十年^{大藏}癸酉後五月十一日

桑門 日 蓮 之を記す